

## 会 議 録

審議会等の会議を次のとおり開催しました。

### 【審議会等の名称】

令和5年度綾瀬市総合教育会議第1回会議

### 【開催日時】

令和5年11月6日(月)午前10時00分～11時50分

### 【開催場所】

綾瀬市役所 事務棟6階 視聴覚室

### 【議題】

協議・調整事項

(1) 読書活動の推進について

### 【出席者】

(綾瀬市長)

古塩政由

(綾瀬市教育委員会)

(教育長)

袴田毅

(教育委員)

田中恵吾、平出恵子、亀ヶ谷由美子、齊藤隆訓

(関係者)

教育部長、学校教育課長、教育指導課長、教育研究所長、生涯学習課長

(事務局関係)

経営企画部長、企画課長、教育総務課長 他3名

## 【傍聴者数】

0名

## 【問い合わせ先】

(担当) 企画課 政策経営担当

(電話番号) 0467-70-5635

(メールアドレス) wm.705635@city.ayase.kanagawa.jp

## 【内容】 要点筆記

あいさつ

〔古塩市長(以下 市長)〕

〔袴田教育長(以下 教育長)〕

協議・調整事項

(1) 読書活動の推進について

教育指導課より綾瀬の現状、取組、課題について説明。

(市長)

続いて、私の考えを述べさせていただきたい。私は読書に非常に思い入れが強いので言い過ぎることがあるかもしれないが、御容赦願いたい。私の思いを伝えたいと思う。

最近の子どもは本を読まなくなったと世間一般に言われているが、そのようなことはない。小中学生に限れば、本の読書率は下がっていないと言われている。学校教育が非常に努力して、例えば「朝読」など、本を読ませる様々な環境を整備しているおかげで、子どもの読書量は減っていない。

問題は、高校生になると極端に本を読まなくなることだ。大学に行ったらほとんど本を読まないというところから、子どもは本を読まないのではないかと言われている。

それからもう1つの問題は、デジタル化によってデジタルテキストを使って読書ができるようになっていたと言われていたが、実際にはなっていない。大学生がデジタルで読書したかというところ、8割の大学生は1か月に1冊も読んでいない。紙の本の場合は5割くらいが1か月に1冊も読んでいない。紙の本の方がまだデジタルより読まれているという程度であり、デジタル化が進んだからデジタルで様々なものが代替されているということではないようだ。

まずは紙の本を対象に様々な施策を行っていかねばいけないと思う。

教育指導課長から説明があったように、綾瀬市は読書環境はそろってきたが、全国

学力学習状況調査の結果を見ると、それが学力につながっていないという問題がある。この現状を我々は真摯に受けとめなければいけないが、読書活動の推進は誤った方策ではないと思う。これからさらに積極的に学校現場でも続けていってほしいと思う。成果はいつの日か必ずついてくると信じている。

ただ、読解力の向上に課題があることも確かである。これから何らかの手を打っていかねばいけない。

一般に、読書量が多いほど読解力が上がるという調査結果が出ている。それが綾瀬市では調査結果に表れず、いわゆる学力につながっていない。

読解力はなぜ身に付くか。それは読解力と同時に語彙力、言葉の数だ。語彙力が読解力とつながる。語彙が豊富であれば、読んで理解でき、読解力も上がっていく。読解力が上がってくると、量を読むことができるから語彙力も増えていく。そうした意味では、読解力と語彙力、両方取り組まないといけない。

語彙力は当然読書をすれば増えるが、語彙力を増やすには乳幼児期からの教育が重要だとよく言われている。家庭の読み聞かせによって乳幼児期から言葉を覚え、言葉を使っていくことで、どんどん広がりが出てくる。乳幼児期から読み聞かせの頻度が高ければ高いほど、幼児期の語彙力は増え、語彙力が増えれば、学校に上がって読解力につながっていく。

語彙力と読解力が上がっていくと様々なものを理解できるので、当然学力につながっていくのだと思う。それが無いから、一時話題になった教科書が読めない子どもたちという問題も出てくる。綾瀬市は小学校の正答率が低い、小学校の学力は先ほど言ったように乳幼児期の語彙力も影響しているのではないかと。小さい時に語彙力を高めていくことで、学校に上がって読解力が上がっていく。それが学力につながっているのではないかと。家庭だけ、学校だけ、高校だけ、大学だけで完結するのではなく、ずっとつながっている。学び続けるということは読み続けるということにつながってくるのかもしれない。そういった意味で、読書活動や読書の議論をするときには、本来はまず家庭でどういうことをするかということが非常に重要だ。

さらに、ある学者が言うには、読書活動が学力につながるということは、ある意味で経済格差による学力差をかなり抑えることになるそう。1人1冊配本事業でも経済格差の是正につながる。配られた本をしっかりと読んで、語彙力と読解力を身につけ、学力につなげていくということが重要だと思う。そういう意味では、配本事業はこれからさらに有効になるだろう。配るだけでなく、配った後の問題がセカンドステップになってくると思う。

それから、学校図書館が本当に綺麗になり環境が良くなった。私が子どものときは全く違う。しかし、綺麗になっただけで我々は満足してはいけない。学校司書がどのような取組を行っていくかがこれから問われてくる。ある意味でステップアップしていくことがこれから必要だと思う。

それから、学力につなげるということのみについて、テストの話になってしまうが、学習には日常の言葉ではなく学習語彙が必要だ。学習語彙を習得しないと、少なくともテストはできない。学習語彙とは、アカデミックテキストを理解するのに必要

な言葉だと言われているが、日常の言語とは少し違う。こちらでも習得しないといけない。それは家庭ではきっと難しいだろう。家庭でどんなに読み聞かせをして語彙を増やして読書をして、その中には学習語彙が入ってない。学習語彙がないと、テストができない。直接学力の話をしてしまうと、そういうことがあるようだ。口語と、物語を読んで得られる語彙と、勉強やテストを受けるための語彙は違うということを意識して教えないといけない。

日本語を教えているボランティアグループがあり、そこでは子どもに勉強も教えている。日本語をペラペラに話せる子どもがなぜテストはできないのか、よく調べると、問題文を読めず意味が分かっていないということがあった。それは先ほど言った学習語彙が不足しているからだ。日常では話せるのに試験となると分からない。そうした子どもにどう対策していくか。学習語彙ばかり教えればいいのかというものではないが、学力につながるのであれば、そういうものが必要になる。

さらに言うと、その学習語彙の中で、今の子どもは接続詞が分からないということが本に書いてあった。例えば、SNSなど短い文章では接続詞を使わない。そういうものばかり読んでいると接続詞の関係が分からなくなる。国語の試験では論理性や文章のつながりが分からなくなる。だから、「かつ」「ただし」「すなわち」などの接続詞が使われると、AとBの関係がどうなるのか、同じことを言っているのか、対立したことなのか、そういったことが非常に分かりにくくなっているようだ。これはSNSなどの影響かもしれないし、ちゃんとした読書をしていない影響かもしれない。これからはそうした問題も対応していかななくてはならないと思う。

評論家の故・山崎正和が言っていたが、今は個性の時代で、すぐ独創性や特異性、個性を求められる。人間が個性を生まれつき持っているものだと勘違いしている。個性は生まれたときから持っているわけではなく、様々な経験によって個性が生まれてくる。しかし学校では、思ったことを自由に書きなさいと指導したり、子どもたちに要求する。人間というのは教えられた言葉で物を考える。教えられた言葉で物事を考えて、様々なものを外から吸収して、それを自分なりに理解して、そして自分が何かを発する。それが個性になるのであって、もともと個性を持っているわけではない。もともと言葉を持っているわけではない。だから、様々なものを読み、自分のものにして、そして初めて自分の考えや自分の言葉を自由に使うことができるのだと、山崎正和氏は言っている。

そういう意味ではやはり本を読み、多くを自分のものにしなければならない。本も読まない、何も経験しない人が、それが俺流だとか自分の個性だとか言い、個性があるように思われているかもしれないが、人間はもともと個性はない。個性は外から得られたものをどう消化していくか、その過程からしか生まれない。様々な有名な作家は、生涯、無数の文献や本を読んで、それを自分のものにして、その上で初めて自分の言葉で物語や論文を書いているのであってゼロから生まれていない。

そういう意味では、子どもたちにもそういった機会をたくさん与えて、本を読ませる、経験する、自分のものにする。そして初めて個性が生まれてくる。こうした順番でないといけないのではないかと山崎正和氏が言っているが、きっとそうなんだと思

う。しかし、今の時代は何もしないですぐに個性を求めたりする。それは無理な注文だ。学校で自分の思ったことを書きなさいと言われても、本来子どもは困る。そこで書ける子と書けない子の差は何かというと、やはり本を読んでいるかどうかだ。語彙を自分のものになっているか、経験を自分のものになっているかによって差が出る。自分に入れたものを自分の中から出している。人間はそういうことでしかないのだと言っている。

我々がそういった環境を作っていないと、子どもたちは育っていかない。本を読まない、経験しない、それでは個性は生まれない。私もその通りだと思う。そういう意味で、本当に読書を子どもたちにやらせたい。読み続けることが学び続けることになってくると、私は思っている。

ファーストステップとして読書環境がだんだんそろいつつあるので、その次に、読書をどううまく活用していくかというところをぜひ皆様と議論していきたい。

(田中委員)

読書活動の真の定着は、市長が話した通り、なかなか難しい問題だと考えている。

学校教育、大学、さらに生涯学習の視点からも、そのベースになるための家庭教育が重要だが、その大元になるのは、幼児のときにどれだけ本に触れるか、本を読み聞かせるかである。こうした語彙に触れる機会があって、さらにそれをもとに、小学校、中学校、高校、大学、一般、そういう中で定着するように、家庭教育が大事かと思う。

実は先日、知人と話す中で、幼稚園の頃に保護者が寝る前に読み聞かせを必ず10分間しており、その子どもは今30代~40代の大人になり、学習の理解力などはよく分からないけれども、学び続けることの土台になっているという話を聞いた。

綾瀬市では、ブックファーストあるいはブックセカンド、小学校での1人1冊配本というように、子どもに本を渡す施策を行っていることは大きいと思う。ただ、生涯学習課のあやせゼロの日運動のアンケートの結果では、残念ながら、そういうチャンスがあるけれど家庭は知らない、あるいは読み聞かせはやっていないという結果が出ているのは残念だ。そのようなところをもう少し深めていただく必要があると思う。それを受けて、学校ではなかなか全国学力学習状況調査に効果が表れておらず、いつも歯がゆい思いで見ている。

それから学校の取り組み方についてだが、読書というと、やはり国語の印象が残るが、読解力は必ずしも国語の授業の中だけではないと思う。理科、社会、音楽あるいは家庭科、学校の中の横のつながりや授業づくり、そういったものを本当に進めていかないと大変だと思う。

(市長)

乳幼児に対する取り組みは行政がなかなかできない。保育園に無理を言ってお願いしているが、とても大変というようなことを言われる。幼稚園は園ごとにかなり個性を出しているから、幼稚園は可能なのかもしれない。しかし圧倒的に人数が多いのは保育園だ。保育園の本は市が用意しているけれども、なかなかやはり難しい。やはり読み聞かせの種は、まず家庭からだ。綾瀬は読み聞かせの習慣が弱いのだと思う。

本を与えても読み聞かせしないと仕方がない。

(田中委員)

先程の例で、当時3歳から4歳の頃の保護者の読み聞かせで、すごく大事な行為だ。夢を持たせる。それを土台にして、学校、大学、やり方を考えていくような。

(市長)

話が少しそれてしまうが、保護者が読み聞かせすると、単に上から下まで文章を読むだけではなく、途中で説明が入ったりする。そこから想像力や空想力、様々なものが入ることによってなおさら記憶に残ったり、絵の説明をしたり、それもやはり重要なのだと思う。そこでまた新しい語彙が生まれる。そういう意味では、読み聞かせが重要だけれども、なかなか進まない。

「ゼロの日運動」は否定的な言い方ではないだろうか。分かりにくいのではないか。ゼロの日とは、何かを“やらない”運動だ。運動するということは、何かを“やる”という運動なのであって、その方向性を示すのが運動体だ。だから“しない”という運動は本来ない。否定的な運動体を作ってしまった。ゼロの日運動は“しない日”だろう。それならば“読み聞かせの日”と言えば、はっきり分かる。この名前でもいいかどうかは別にして、その否定的な運動方向は非常に分かりにくい。全部、テレビ消す、ラジオを消す、ということはゼロなのかもしれないが、それでは何をするのかが伝わらない。家族団らんなど言っているけれども、それもいいが、では運動の方向を見せる、家族団らんの日という名前にすればいいのではないだろうか。

家庭での読書週間、乳幼児期の読み聞かせというのは大変重要だと思う。ずっと大学生までつながっているのだから。家庭でものすごい量の読み聞かせをやってほしいと言うわけではない。そういう習慣、ちょっとの時間で、少しでも語彙が増えていけば、学校に入ってからが楽になる。そして本が読めるようになる。

家庭に膨大なことを要求しているわけではないが、そこがやはり一番難しいのだろう。皆さんは読み聞かせをやっていたか。

(亀ヶ谷委員)

私が小学校に上がった4月から1か月に1回、母と本屋へ行き、「この中から好きな本を1冊選んで読んでごらん」ということを卒業するまで毎月やっていた。当時は普通だと思っていたが、今思えばとてもよかったと思う。

様々な本を読んだが、私は野山で遊んでいてとても昆虫が好きだった。だから一番心に残っているのはファーブル昆虫記で、いまだにテレビなどで紹介されていると懐かしいと思ったりする。そうやって育ってきたので、私も自分の子どもたちに読み聞かせをしてきた。子どもはただ読むだけでは嫌がるので、抑揚をつけないといけなかったり、とても大変な思いをした記憶もある。

(市長)

だから先ほど言った、読むだけでないプラス負荷がかかる。

(亀ヶ谷委員)

そう、だから先に進まなくなる。もう1回今のところを読んでと子どもが言うと、また前のページに戻らないといけなかったりする。しかし、そういうことも今となっ

ては、子どもたちと接する良い時間だったと思う。

それ以外に、小学校の毎日の音読。これもまた忙しいときに聞かないといけませんが、なるべく耳を向けて聞いてあげないと子どもも読む気がなくなってしまうので、ご飯を作りながら音読を聞いたり、読んだ後に押すためのかわいい判子を買ってきたり、少しでも子どもが前向きになるようなメッセージを書いてみたりしていた。それを3人分やってきたので、本を通して子どもと接する機会は多分たくさんあったと思う。

今回の読書活動推進の取り組みについての資料についてだが、今全国で学校司書を配置している学校は6割しかないと記事で見た。綾瀬市ではすでに全校に配置しているということは、すごいことだと思う。なかなか表面に出てこないことを綾瀬市はいつもきっちり行っている。タブレットの配布についても文科省の分科会でもとても早かったということで他市の教育長にも褒められた。学校司書もとても早い段階で全校配置したことをもっとアピールすればいいのではないかと思う。

(市長)

アピールするのはいいが、私たちは単に読書量が増えただけでは駄目だ。それが学力や生きる力につながることによって初めてアピールできる。それにつながらなかつたら、無駄な投資ではないかと言われる。

(亀ヶ谷委員)

全国で6割のところをもうすでに全校配置したということは、やはりすごいことだと思う。費用もかかっているし努力もしていると思う。学校訪問のたびに、その学校図書館を拝見し、学校司書の努力がいたるところに感じられた。

皆さんの手元にある資料は綾北中学校からいただいた。1人1冊配本事業に関して、学校から配布されるブックリストはモノクロ印刷のプリントに本の題名と簡単な内容説明がある一覧だが、中学校5校の学校司書が連携して作ったこちらの資料は、本の表紙がカラー印刷され、内容説明も書いてあり、モノクロで見ると選ぶよりも、こちらを見た方が本を読みたいと思わせる、興味をそそらせる作りをしている。また、綾北中学校は海外につながるのある子どもが多い学校で、普通の図書室たより以外に、やさしい日本語の図書室たよりも提示されている。このような取り組みをもう少し周知したほうがいいのではないかと考えて今回、学校から借りてきた。

綾瀬市のどの小学校中学校に行っても、学校司書の子どもに対する、本を何とか手に取ってもらおう、何とか興味を持ってもらおうという気持ちが様々なところに表れている。それはとてもいいことだと思う。それから、横のつながりも大事だ。

視察で大和市の小学校に行ったが、綾瀬市にも引けをとらない素敵な図書館がたくさんあると思う。あとはそれを学力につなげる力だと思う。

本を読むことによって読解力や思考力は上がると思うが、同時に私は想像する力も身につくと思う。この想像する力がないために、相手を傷つけてしまったり、間違った行動に出てしまったりする子どもが多くなっていると思うので、そういう面からでも、読書はすばらしいものだと思う。だから、やはり課題は学力につなげるにはどうしたらいいかということだと思う。現在の綾瀬市の学校図書館に関してはとてもすば

らしいと思った。

(市長)

いえ、学力と言わなくていいが読解力を上げないといけないだろう。大人になっても、学力がなくても読解力があることによってずいぶん違ってくる。例えば、取扱説明書が理解できなかつたら使えない。日常生活ができない。

(亀ヶ谷委員)

取扱説明も動画でやってしまうから余計読まなくなってしまう。

(市長)

マニュアルが読めなかつたら機械を扱えない。ものづくりの現場でも、そういう意味では基本的な語彙力と読解力というのは必要なだろう。

小学校のときの読解力と大人読解力はまた違うだろうから、ずっと続かないといけない。やはりその続ける能力というか続ける体力、そういうものを付けていかないとけないのだろう。子どもときだけ良くてもしかたない。ある意味では、中学校まで読書習慣はある。高校になるとがくっと減って、大学行ったらゼロみたいな話。大学でも読まなかつた人は、社会人になっても本を読まないだろう。仕事によっては求められることもあるかもしれないが、習慣化しないとやはりなかなか読めないと思う。

子どもへの読み聞かせはどのようにしたらよいか。

(亀ヶ谷委員)

感情を全部入れて読むしかない。

(市長)

それなら、まず図書館で行っている読み聞かせの方法など、保護者への啓発が必要になってきてしまう。読み聞かせの経験のない保護者に対して読み聞かせをしましょうといっても、またそこで問題が出てくる。読み聞かせはそれなりの経験が必要なので、読み聞かせの方法という講座を開かないといけなくなる。どんどん話が元に戻ってしまうけれど、読み聞かせをできない保護者は、その前に本を読まない保護者ということだろう。つまり学校で読書習慣ができなかつた保護者ということだろう。

しかし、少なくとも家に本がないということは1人1冊配本事業でなくすことができた。読む時間や環境もできて、これからはそれらをどう使うかということだ。学校図書館もきれいになり、いつでも遊びに行ける快適な環境もそろってきて、相談すれば学校司書が教えてくれる。そこまで環境がそろった。そこから、この今日の課題である読解力の方にどうつなげていくか。

読み聞かせからいろいろなものができるのだろうが、だから学校だけでいくらやっても、やはりその前の読み聞かせによる基本的なベースがないと、時間がかかってしまうのだろうか。おそらく綾瀬市では、それで時間がかかっているのだと思う。

1人1冊配本事業で配られた本は、どういうふうに活用しているのか、家に持って帰るだけなのか。

(亀ヶ谷委員)

読んでくれたのか、その先も気になる。感想文などがあればいいが、読んでいるの



だろうか。

(市長)

1人1冊配本事業も学校司書が選書をごんばってくれているからこういう形で配布できて、それなりに適切な本が配布できているけれども。

話が飛んでしまうが、本の町ということで八戸市が読書のことで様々なことを実施している。1人1冊配本ではなく、子どもたちに2000円の図書券を配っている。八戸市でしか使えない図書券で、本しか買えない図書券を配っている。綾瀬市ではこういうことをしていると伝えると、進んでいると言われた。八戸市は1校に1人ずつ学校司書がないので、ブックリストの選書など、そういったことはできないから図書券で配っていると言っていた。

そういう意味で綾瀬市はそういう条件がそろってきている。せっかく投資しているのだからなんとかそれを生かしたい。

(平出委員)

まず、家庭での読書について、他の家庭も多分同じではないかと思うが、1人目の子どもは一生懸命育てているように思う。自分も1人目のときは図書館に本を借りに行って、一生懸命本を読み聞かせして一緒に楽しく読んでいた。しかし、下の子には、どうしても上の子の幼稚園の送り迎えなどで時間に制限があったり、慌ただしくてなかなか本を読んであげられなかった。また、特にうちの場合、下の子はパズルなどに集中するタイプだったので、1時間、2時間は平気でパズルをやっている子だった。そうすると家事もはかどってしまい、読む必要もないだろうという気持ちになり、あまり本を読んであげられなかった。すると、やはり1人目の子は小学校・中学校に行っても本が好きでずっと図書委員をやる子に育ち、逆に下の子は、あまり本は読まないけれど、パズルが好きだったせいか、謎解きや数学的なことに関してとても興味のある子に育った。だから、そういうところも関係するのだろうと思う。

本を読むことで、たしかに読解力や語彙力の成長もあるが、登場人物の気持ちに寄り添って、その気持ちを汲むことで人の心を思いやる、心の成長が期待できるのではないかと思うので、やはり本を読む子に育ててほしいとも思っている。先日、ハリーポッターについて話していたときに、本を読んでいた子の方が内容も分かっていたし、描かれる友情や勇気などについて話していたので、身に付いているように感じた。やはり映像ではない。下の子の悪口を言うわけではないが、ただ、子どものタイプも関係あるだろうというのが正直なところでもある。ただ、様々なタイプの子どもがいると思うので、それぞれの成長に合わせて家庭読書を進めるとよいと思う。

学校図書館について、私が教育委員の仕事をする以前に、綾瀬中学校で司書のボランティアをしていた。その頃はまだ司書も配置されておらず、蔵書管理システムもなかったもので、学校図書館はカーテンが閉まった状態で、本も少し古びたものもあった。昼休みに子どもたちが来て、手書きで貸し借りの作業を行っていた。平成29年に学校司書と蔵書管理システムが入ってから7年ということで、本当に様変わりしたと感じている。

先日、亀ヶ谷委員と、当時大変お世話になった司書に話を聞きに行った。司書もそ

れぞれ特徴を出して、子どもが本を読むように取り組んでいるが、もっと各校の司書同士の横のつながりや会議などを持ってたらいいと話していた。今は年2回、市役所で会議を行うようだが、以前、年に4回、中学校で会議を開催したときがあり、その際に各校の司書が他の中学校の図書館を見ることができてとてもよかった。司書になり7年経つけれど、小学校の図書館にはいまだに1度も行ったことがないという話も聞いた。

やはり他の司書たちの話を聞いたり活動の様子を見たりすることで、さらに取り組みが充実していくのではないかと感じた。

また、今年、新しい司書が5人入ったそうだが、研修などが行われておらず、不安を抱えている様子もあると聞いた。今年は各校の司書15人に配置換えや入れ替えがあったが、研修や引き継ぎにあまり時間が取れないということも聞いた。綾北中学校の司書は、引き継ぎのために教頭先生に仲介に入ってもらい特別に時間を設けてもらったそうだ。先日大和市の図書館を見学したとき、司書同士の間を取り持ったり、学校とつないだりするスーパーバイザーという方がいたと伝えると、そういう人がぜひ欲しいと思っていたという話も聞いた。

やはり司書の活動をもっと充実させていくことで、その学校図書館の取り組みも充実してくると思う。それが子どもたちのもっと読みたいという意欲や読書推進につながっていくのではと思う。その辺りもフォローして取り組んでいけたらよいと思っている。

(市長)

司書の問題はあるだろう。司書によって違いすぎるということは私も言われている。司書の個性を出すこともよいが、ある程度の共通項のところは同じレベルで取り組み、それから自分の個性でもいいと思う。ばらつきを改修するために、司書を異動させたのだろうか。今、司書はどのような方向で取り組まれているのか。

(教育指導課長)

学校司書は先ほども申したように平成29年度から全校配置を始めている。それから大きな異動は特に行っていない。今年度の最初に、丸5年経過したこの機会に合わせて異動を行った。平出委員が話していたように、5人の新しい方が同時に入ったので、本当に引き継ぎや研修体制はまだまだ課題があると思う。教育指導課としては改善していかなければと考えている。

(市長)

平出委員も亀ヶ谷委員も学校図書館を見ているけれども、同時に全部の図書館を見ないといけないのだろう。私には良いところしか見せてくれないから良い話しか聞いていないけれど、やはり見るのだったら全部を見ないといけない。担当課が見学先を指定すると、大体良いところしか見せてくれない。

(教育長)

教育委員は1年に4校回っている。

(市長)

全校を回ってもらわないといけない。

(平出委員)

司書が各校を回る機会があったらもっといいのだろうと思う。

(市長)

司書が市役所に集まって会議をしていると私も聞いたので、当番校を決めて当番の学校の図書館でやってくださいと言った。そうすれば他の図書館の様子が分かるだろう。会議を開催すること自体はよいことだが、やはり違いを知ることが必要だと思う。司書の資質のさらなる向上も必要だろう。何回も言うが、環境がそろったのだから司書にがんばってもらい、いかに読書好きな子をつくってもらおうか。

先ほど話した、教科書が読めない子どもたちやマニュアルが読めない大人たちについても問題と言われているが、まさに産業社会にとって必須である取扱説明書やマニュアルが読めない若者が現場に入ってどうやって仕事をしていくのか。今は動画で説明を見せるから簡単な扱いは分かるけれども、動画はそこまでだ。分かったつもりになっているけれども、そこまでしかできない。日本の取扱説明書はやたら分厚い、アメリカもそうだろうが、やたら分厚い。あれを読みこなすことは大変かもしれないが、読みこなす能力は必要だろう。

今のものづくりの現場ではどうだろうか。

(齊藤委員)

私の会社でも、読める子と読めない子ではとても差がある。会話の中でも単語が分からない、私が何を言っているのか分からないなど。私の会社では共通言語をまず作る。まず語彙力。会社で使う言葉というものを、共通項で使って伝えることをしていく。マニュアルにしても、会社の就業時間の中で読む時間を作ってあげて、それに対して動かしてごらんということ、山本五十六(いそろく)ではないけれども、やってみせて言って聞かせてやらせてみて、褒めてやらねば人は動かじ、ということを幹部社員に教育をして実施している。やはり本を読む・読まないによってとても大きな差が出ている。

私は綾瀬市の図書館を見ると、ある程度の条件がそろっていると思う。そうすると、先ほど話のあった家庭教育というのだろうか、やはり読むことが一丁目一番地だと思う。例えばゼロの日を読書の日にするなど、プラスアルファの付加価値を付けていく。それから、子ども1人に1冊配った本。この1冊が家庭でどのように活用されているのか。ここを調べて、その活用を市として提供する。やはりこうしたところを、スコアリングではないけれども、目に見える形で出てこないと「なんとなく何かいいことやっているな」というだけで終わる。

大和市の図書館も全国で表彰されたとしても学力につながっていない。もう10年以上取り組みをしていると思うが、ここをどうつなげていくかということが1つのポイントになると思っている。

自社の社員たちにも、理解するということに対して「分からなかったら質問してくれ、それに対して説明するから」と伝えている。会社の教育もパワハラにならないように「質問は2万回までしていいよ、分からないことがあったらちゃんと教えるから」というように丁寧にやっている。

だから、先程のゼロの日運動も本当にやるなら毎週何曜日、月に1回ならその日は学校が絶対アナウンスするなど、親が気付くような発信があればよい。親が子どもに本を読みなさいというふうに言える環境を作っていないといけない。本に興味ある子は読むけど、興味ない子は全く本を読まないと思う。やはり小中学生ぐらいまでは親が環境を作っていないといけない。

親が環境を作っていないといけない中で、今はコミュニティスクール構想もあるから、今度はコミュニティが環境を作っていないといけない。そうすると、その大元の種がもう準備できているような気がするので、あとは資料に書いてある今後の展望の部分のところを少し深掘りして対策できれば、何かすごくいい形になるのではないかな。

昨日ちょうどオリックスと阪神の日本シリーズの試合をやっていて、オリックスはどこにあるのか、自分の子どもが聞いてきた。そうして両方大阪だとか京セラドームだとか、興味あることからつなげていくと結構覚える。だから、忙しいからといっても、親として子どもの質問に対して丁寧に答える、丁寧に教えていくという家庭環境が大事。家庭教育はとても大事だということを改めて感じている。

(市長)

読み聞かせは会話でもある。子どもが「分からない」「どうして」と聞く、そこから様々なことがプラスアルファで出てくる。学校もそうなのだろうし、図書館、学校図書館もそういった会話なのかもしれない。

読書も、読書量、冊数だけではない。1冊を10回読んでもいい。そのような読み方もまた必要だと思う。10回読めば、また違ったところが出てくる。私は、1回読んだだけではだめだとか、1人1冊だから、たくさん配ってないから同じ本を読んでと言っているわけではない。同じものを何回も読むことも重要である。1回読んで全部覚えるわけではないし、様々な気づきも生まれるわけで、そういう意味で1つの本にこだわって何回も読むということも重要なのではないかなと思う。

自分が子どものときは、当時は日本社会全部が貧しいから本があふれているわけではなかった。今でも私は小学生のときに読んだ「宝島」は表紙まで皮膚感覚で覚えている。見比べて読んでいたことを覚えている。これほど本がないからずっとそればかり読んできたのだろうが、そういった皮膚感覚で読むみたいなものも重要だと思う。ただ、今はあまりにも本が多いからそういう読み方をしない。

作家の司馬遼太郎は、江戸から明治にかけての人々がなぜあれほど優秀だったのか、彼らの本の読み方は、江戸時代の藩塾もそうだが、何回も同じことを読ませて暗記させていたと言っている。全部覚えてしまう。単に覚えればよいという話ではなくて、それを理解する。だから司馬遼太郎は、掘るように読めと言っている。一字一字掘るぐらいにじっくり何回も読んで理解しろ、と。量だけではなく、そういうことも必要だ。掘るほどでなくても本がないからいつも同じように読んでいたら、結果がそうなったのかもしれないが、やはりそのような体験も重要だと思う。

今も私は読みながら本にすぐ線を引いてしまうけれども、どうしても2回も読まないといけない本を読むと、1回目とは違うところに線を引きたくなる。だからやはり1

回目と2回目では違ってくる。そういうこともまた必要かと思う。

1人1冊配本の結果やどのように使っているかをもう少し調べた方がいいかもしれない。

(齊藤委員)

子どもにとっては、自分の本というものはうれしいと思う。もし本が家にない場合に、その後、何百回も読むと思う。

(市長)

それが重要なのだと思う。

(齊藤委員)

だから本当に配った本が生かされているのかを調べると、次のアクションが変わるような気がする。綾瀬市の小学校の図書館も、私は良いと思っている。本当に良い環境がそろってきたのでないか。

(市長)

図書館に行って無理やり本を読めということではなくて、とりあえず気持ちがいいからそこに行くという居場所であって、周りに本がたくさんあるから、じゃあ本を取って読もうか、くらいでいいのだと思う。司書の人がこれ読みなさいというものではないと思う。雰囲気良く、本のある環境が落ちつけるというのが一番理想だ。

(田中委員)

皆さんが話したように、昔の図書室のイメージから比べると、今の図書館は財政的に困難な時期に関わらず環境的に充実している。ただ、大和市の図書館も視察したところ、大和市では漫画本のようなものが多くなっているように感じ、綾瀬市の図書館の方も、そうしたものが若干見受けられるような気がする。漫画は本を読むいいきっかけになると思うが、それが読解力や語彙力につながっていくのか。非常に難しい問題だが。

(市長)

もともと漫画は絵で見せようとしているわけで、読解力はいらない、語彙もいらない。それが情報伝達の手段では非常に有効なものであるし、物事を知るという意味では重要なものだけれど、それ以上の深みはないのか。いや、今は漫画にも様々な種類があるからそれは違うかもしれないけれど。

(田中委員)

そうしたニーズがあり、決して漫画がよくないとは思わないけれど、やはり将来的につながっていくような読書になればいいと思う。漫画はいいきっかけだと思っている。図書館が昔のイメージとは変わってきている。環境整備については、大和市も視察したが、綾瀬市の図書館は決して劣っていないと思う。財政的に厳しい時代だが、バック支援はもう十分できつつある。それから市立図書館も何年か先にまた新しい構想がある。

資料を見る限りでも様々な取り組みが行われているが、市立図書館と学校図書館の連携や、先ほど大和市のスーパーバイザーの話があったが、そうしたものも1つのつながり、さらには、読解力を上げるためのアドバイスなども考えていけるかと思う。

ちょっとその漫画的なものが……。

(市長)

いや、いわゆるそういう本は反対に少ないと思った。もっと多くしてほしいという意味ではなく、思っていたより少ないと思った。本の最初の第一歩は漫画でいいのではないか。本を手を持つというところから始めれば。あとは、とても簡単に手に取って読めるような単純な話が少ないと私は思った。もっと様々なステップを踏んでいいのではないか。でも学校司書は嫌がるかもしれないが。

田中委員が言うように、ある程度条件がそろってきた。そして学校司書もいる。今までの学校司書がいかに読書環境を整えるか、熱意を注いできたのだと思う。これからはセカンドステップとして、どのような本を子どもたちに読ませて読解力につなげるか、司書も少し取り組んでいかないといけないのかなと感じる。

(田中委員)

子どもがどう読書活動の推進に関わるかということで、先日、図書委員会のフォーラムがあった。これからは生徒児童自身が関わっていくような場を持たせることにポイントを当てていくとおもしろいのではないかと思う。子ども司書のような、図書委員の委員長や児童会の会長でもいいが、それぞれの学校で子ども司書的なものをつくるのもおもしろいのではないか。

あるいは、先ほどの読み聞かせに関して、どこかの県がICTを活用し、プロのように上手な人の読み聞かせを配信する取り組みを行っているを見て、おもしろいと思った。家庭での読み聞かせがなかなか難しい場合には、そういったものを月1回ゼロの日運動のときなどに配信していくことも、またおもしろいのではないか。

(市長)

認知症の高齢者にも、デジタルブックで寝ながら物語を聞いている方がいるけれども。本当はプラスアルファをやるには、やはり保護者が読み聞かせをすることがほしいけれども、そこまで求めることは今の時代ではもう厳しいかもしれない。

(田中委員)

先ほど言ったように、本当に読解力や読書量が高まるのは、保護者が直に読み聞かせをし、子どもに聞かれたら説明してあげるなど、そういう繰り返しで本当は大事だと思うけれど、なかなか難しい。

(市長)

単純に読書量は保護者の蔵書量に比例すると言われている。保護者がまず読まないとだめというところからすると、保護者が1冊も本がなく、初めての本が1人1冊の配本だったという家庭もあるかもしれない。その家庭がその1冊を大事に扱ってくれれば、こんなにいいことはない。その1冊が宝なのか、ゴミなのか。1冊も本がない家庭に配布されて宝になってくれるとありがたい。

(田中委員)

配布された本を友達同士で紹介しあうなどの取り組みは行われていないのか。小学校低学年や保育園、幼稚園の子どもは難しいけれど、小学校高学年ぐらいなら様々な例ができるかもしれない。

(教育指導課長)

教育委員会として指示はしていないが、先生によっては本を紹介しあったり、ビブリオバトルのように紹介をして良かったところをプレゼンテーションしていく。そうした授業への取り組みにつなげている先生もいることは聞いている。

(市長)

そういうことを少し大きく取り組んでいただけるといい。

(田中委員)

そういう事例がたくさん上がってくると1人1冊配本事業の成果になる。

(市長)

多くなくていい。その本だけでいい。

(齊藤委員)

教育委員でまた学校に行ったときに、読書に対して学校で取り組んで良かったことなどを一度、15校分を全て表にしてみたら、何か違いが出てくるのではないかと。先ほど言ったビブリオバトルはなかなかおもしろいと思う。

(市長)

本を読むきっかけになるだろう。じっくり読まないでビブリオバトルはできない。

(齊藤委員)

取組を発表してくださいと言うと労力をかけてしまうので、1回ヒアリングしてまとめてみる。今は点でしかないけど、やはり一覧表にしてみたら何らかの結果が出ると思う。

例えば大和市で行っていた、図書委員が先生がしおりに絵を書いてくれて、あなたのしおりとして渡す。これだけで子どもは本に興味が出たりする。

(田中委員)

綾瀬市でも自分の読書カードを作っている学校もある。これは全校やっているか。

(教育指導課長)

あれは各学校の取り組みで、全校ではない。

(田中委員)

財政的に厳しい中だが、蔵書管理システム、カラープリンターを徐々に導入してきた。蔵書管理システムとは、システムの中に読書カードを差し込むとすぐ見つかるような仕組みなのか。

(教育指導課長)

蔵書管理システムは、貸出や返却の際に、子どもたちの自分のバーコードを使用する。通常の場合、子どもたちのバーコードがファイルで置いてある。例えば、渡辺君が借りに来たときファイルから渡辺君のバーコードを探して読み取って本を貸し出す。そこで少し手間が生まれる。以前ご覧になった学校での取り組みは、子どもに自分用のバーコードをあげて、借りる時に使ってもらう。市立図書館の図書カードと同じような感じだ。プレゼントのように、そういったことを行っている学校もある。

(田中委員)

学校図書館の環境整備は本当に他市に劣らず、超えるぐらいがんばっている状況

だ。それを使いながら、今度は学校間の横のつながりや情報提供を考えていくといいかもしれない。年2回の会議の内容を充実していく。他校の取り組みを取り入れる、中学校でやっている展示会を小学校でもやってみるなど、遠い長い道だが、読解力や読書量につなげるため取り組んでみてはどうだろうか。

ある調査では、20代から60代の方で紙ベースの本を読んでいる人の方が理解力や読解力、それから心の面、思いやりなどが高い傾向があると読んだ。

図書館の取り組みを情報交換する中で読書量を高めていただく。遠い道のりになるけれど読解力や学力につながる。

(市長)

幼児教育では認知能力と非認知能力があり、デジタル教材は認知能力、つまり知識を得ることは可能だろうけれども、それ以上の広がりがない。やはり本には、様々なプラスアルファの効果があり、非認知能力を育てる効果は本の方があるのではないかと思っている。両方必要だけれども。思いやりや忍耐力、友達との関係をうまくやっていく力なども読書から十分得られる。そういった意味で学力だけの問題ではないと思う。ただ、一番分かりやすいものは学力だ。

教育長は元教師としてどう思うか。

(教育長)

皆さんから様々な意見が出た。今もしっかりと取り組んでいると思うが、様々な改善点が出てきたので、取り組めるところは教育委員会部局だけでなく市長部局の方でも取り組んでもらいたい。

まず、今まで進めてきた綾瀬市の読書活動は本当に間違っていない、とてもよかったと思っている。今年の全国学力学習状況調査の結果では市内中学校の正答率は全国平均と比べるとマイナス3.9とある。この子たちが小学校6年生のときにも調査を受けており、読む能力についての正答率を全国と比べるとマイナス7.7だった。そこから比べると、実は正答率は3.8%も差が縮まりアップしている。それから国語の傾向では小学校より中学校のほうが正答率が高い。それはやはり読解力に影響が出てきているのかと思う。

(市長)

徐々に良くなっている。

(教育長)

それともう一つ、無回答率というものがある。最近の全国学力学習状況調査の問題はとても長い。実際に解いてみると分かるが、私もとても時間がかかる。集中して読まないといけない。昔の子どもは長いだけでももう読まない。読むのが楽しいと思えば、読んで様々なことが学べると思えば読むけれども、長いだけでももうやめたとなってしまう。実は、この読んでいない無回答率についても、今年の中学3年生が小学校6年生のときは9.31%だった。今年は2.21%になり、間違いなくかなり読むようになってきた。

さらに、書くことについても、学年によって大分差があるので単純比較できないが、同じ集団で、今の中学3年生が小学校6年生のときと比べると正答率が良くなっ



ている。

ただし、やはり全国に比べるとマイナスということが独り歩きしてしまい、綾瀬市は学力が低いと言われるのだが、様々なデータを見ると、決してそうではないと思っている。

それから国語の教師としては、とにかく国語という教科は、漢字や文法、文学史などは覚えなさいといけなけれども、あとは本さえ読んでいけばいい、読書さえしていればちゃんと国語の力が付くと、子どもに話していた。やはり読書が大事なのだが、読まない子に対しては読む楽しさを何とかして教えないといけな。そこが一番難しいところだ。読み聞かせで育った子はそこがもうできていて、ある程度すんなりと読んでいける。ただ、そうではない子は、中学校3年間で1冊も本を読まない子もいる。

本を読めば、様々なことが学べて、様々なことを覚えられる。さらに様々な人と出会える。物語の登場人物、あるいはその作者の物の考え方、こんなことを考えるのかと知り、自分らしさを発見できる。まさに自分らしくということを読んでいけると思う。そういうおもしろさに気付いてくれればと願っている。

来年から新聞記事を読んで学んでいこうと考えている。この新聞記事の良さというのは、まさにその語彙力、それから市長が言った学習言語、いわゆる正しい日本語、そういうところとも結び付く。新聞記事を読むと、こんなことがある、こんなことを考える人がいるなどとおもしろい。そこからまた読書に入っていけると思う。次の仕掛けとして、教育委員会として考えていきたいと思っている。

司書の充実は当然取り組んでいかないといけな。家庭教育については市長部局ともよく連携していかないといけな。特に保育園や幼稚園の保護者に読み聞かせのスキルをぜひ教えてほしい。そういったところも連携していかないといけな。教育委員会としては、本当に配本事業がどれだけ効果が出ているのか、あるいはどれだけ生かされているのか、やはりしっかり検証していかないといけなと思う。

(市長)

学力だけの話になるが、先日、燕市の商工会議所の副会頭と会う機会があった。彼は燕市の教育を考える民間団体の会長で、学校に注文をしているそうだ。燕市は新潟県内でも下から3番目ぐらいに学力の低いところだったが、ベスト5ぐらいに上がったそうだ。彼らが学校に何を注文したかという、論理性だという。学力とは論理が組み立てられないといけな。次が何かが分からないと試験はできない。そこに取り組んでくれと注文したそうだ。論理が一番簡単な数学から始まるのかもしれないが、本を読んで楽しかったというだけでなく、おそらく小説も筋の論理があるだろう、そういう論理を組み立てたり、想像したり、考えたりできるよう、教育委員会に注文したと言っていた。そして学力はとても上がった。同じ読書でも、単に感情的に楽しいということだけでなく、そういった論理性を養うようなものでないと、反対に取扱説明書やマニュアルなども理解できない。やはり両方必要になるのだが。それは先程言った学習言語みたいなものだと思う。燕市の学力のレベルが上がったことが本当か分からないが、しかし、そう話していた。

(齊藤委員)

細川さんという商工会の副会頭がそれを行っている。論理性はとても大事で、物事には順番があり、この順番通りやるのが良い品物を作る。やはり論理性は絶対に必要だ。これをやるから次はこれ、というような積み重ね。そこが昔は日本のものづくりが強かったが、だんだんそういうところも弱くなってきている。こういうことがとても大事だと改めて思う。

(市長)

細川さん自身は教育者ではなく事業者だが、自分の重要な経験からきているのかもしれない。

(齊藤委員)

細川さんは設計組み立て会社だ。

(市長)

やはり論理が重要なのだろう。学力を上げるのであれば、そういう取り組みもある。

(齊藤委員)

燕市はふるさと納税の収入のうち 30 億円くらいを使ってコミュニティエリアというの、地元の人が集えるような場所としてすごい施設を作っていた。毎年 50 億円入ってくる。結果としてそこが教育にもつながってくると感じた。

(市長)

燕市の包丁はとても切れる。すごい技術だが、その技術のもとには論理なのだろう。

(齊藤委員)

順番を間違えると良い品はできない。包丁の研ぎ方も研ぐ場所や研ぐ順番がある。そして最後に「守破離」がある。やはり基本を全部学んで、ある程度レベルが上がってきたら、独自性、先ほど言った個性につながってくる。

(市長)

燕市は様々なアイデアがたくさん出る。それは学んでいるからだ。学んだ職人から新しいアイデアが出る。学ばないとアイデアは出てこない。

来年からスタートする取り組みがあれば、予算はつけるからぜひとも言ってほしい。様々なことをしないとだめだ。

(田中委員)

そう思う。せっかくな環境づくりができあがってきているので、これを生かした様々な取り組みや連携を行ってほしい。

(市長)

今までやってきたことは、目標が見えていて失敗しないやり方だ。学校司書を全校に配置して失敗するわけがない。意欲にしかならない。新しい本を購入することもそう。図書館をきれいにすることもそうだろう。皆、ある意味で共通の目標で失敗しないことをやってきた。ファーストステップができて、これからそれをどう運用していくかは、これはもう成功例は分からない。要はたくさんやってみて失敗の数を重ねることによって、成功を見つけていくしかない。今までやってきたことは、失敗しな

いことだ。これから失敗がたくさんあるだろう。今までは成果が見えることを着実にやっただけ。これからのチャレンジが重要だ。成功するか失敗するかは分からないが、失敗を恐れていたらできないからやってみるしかない。気楽に提案してほしい。

(平出委員)

やはり私は、学校司書同士のつながりや横のつながりという意味で、スーパーバイザーがいれば変わると思う。

(市長)

スーパーバイザーがいなくても、学校司書や図書館がまずはつながらなくてはいけない。つながりがまだできていない。つながりがあって、そこをどう調整していくのがスーパーバイザーであって、つながりづくりはスーパーバイザーが行うことではないと思う。つながりづくりは今だってできる。しかも学校数も少ない。

(平出委員)

それぞれの学校で今までがんばってきたことを共有しあえる場など、そういうことができるといいのではないかと思う。

(市長)

打ち合わせも、市役所ではなく学校図書館で行えばよい。学校司書の間で様々なことを共有しないといけない。

(教育指導課長)

今、スーパーバイザーはいないが、横の連携はとても大事だと思っている。担当指導主事が1人いるが、他の業務も担っているので、そういった意味では、例えば平出委員が言ったようにスーパーバイザーのような方がいれば図書館の業務に特化して当たることができるという点で、大きなところかと思う。ただ、様々な横の連携という点では他にも取り組み方法があると思うので、その辺りも総合的に考えていければいいと思う。

(市長)

横の連携に取り組んでみて、その結果これができなかったけれどスーパーバイザーならできるという話がないといけない。初めから取り入れるのは少し危ない。どちらにしても、まず司書が主体的に取り組まないと、第三者が入ったとしても動かない。やはりまずは自分たちがそういうつもりになっていただかないといけない。

事務局は今日の話聞いて、何か意見があるか。

(教育指導課長)

学校図書館の横の連携や、環境整備の次のステージ、配本事業の検証など、どれも本当に大きな課題だと思っている。少しずつできるところを精査してやっていければと思う。

(生涯学習課長)

まず、「ゼロの日運動」は何をやるのかという点が今ひとつ分からないと意見をいただいた。この名称については見直しをしていく方向で、関係者の方々に都度相談しながら今まさに動いている最中である。

家庭教育については、年間を通じて幼稚園・保育園・小学校・中学校、様々なとこ

ろで講座を展開しているが、やはり子育ての側面での講座が多い。その中でも読書の重要性に取り組んだ形のを展開できたらと思っている。

図書館の運営の中では、子どもたちに向けて様々な事業を実施しているが、さらなる充実としてやっていきたい。ゼロの日運動のアンケートは学校の協力も受けながら隔年で実施している。その中で今度はセカンドブックの配本の成果、どんなふうに行っているかという意見もいただいた。その辺りも設問に加えられたらいいのではないかと考えている。

(市長)

乳幼児期や家庭教育の問題は、まず生涯学習がその家庭の読み聞かせ力や学習力を上げないといけない。もう1つは、読書活動を活発化することによって読解力から学力につなげていくという学校教育の問題がある。しかし、綾瀬市からすれば、その2つの局面だけではなく、一番問題となっている高校生・大学生にどうつなげていき、社会を活性化するかということが一番重要だ。それぞれがバラバラにあるのではなく、一番基礎に家庭の読み聞かせがあり、それに基づいて学校の読解力があり、それをどう高校生・大学生につなげていき、社会人として、どうそれを持ち続けていく、読み続けていく、学習し続ける、そこにどうつなげていくかが私たちの関心である。

そういう意味では、トータルにこの読書の問題は考えていかなければいけないし、小中学校が基礎だから、小中学校で子どもたちが獲得したそういう習慣や読み続ける能力をどう社会にまで引っ張っていけるかが重要だ。小中学校のときだけがんばっただけでは、私たちは困る。私たちのサービスターゲットは社会の活力なのだから、社会で活躍する人材までが私たちのターゲットである。そういった意味では、学校だけでなく、この子たちが卒業したら、高校に行ったら本を読むのか、大学に行ったらどうするのだろう、社会人だったらどうするのだろうということまで、やはり幼児教育からずっと考えていかないといけない問題なのだということがよく分かった。私たちもそういった視点から何か施策があれば進めていきたい。

今日の話の中でまた思いついたことがあれば、ぜひとも教育委員会の方に提案していただきたい。これから失敗しないということはない。今まで失敗していないから、これからは失敗ありで様々なことに挑戦していきたい。

(以上)